事例 １８	チャットを活用した 視覚障害のある生徒と聴覚障害のある生徒のコミュニケーション

総合支援学校　全学部 総合的な学習の時間・特別活動等	キーワード●チャットの活用　●コミュニケーション支援 ●交流及び共同学習

「仲良くなろう～チャットを使ったコミュニケーション～」

１　活動の目的等

●目標

○視覚障害と聴覚障害の生徒同士がチャットを活用してコミュニケーションを行うことができる。
○話し言葉、文字、手話、情報機器等のコミュニケーション手段を状況に合わせて選択し、いろいろな人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

●対応する学習指導要領の内容

教科・領域等	内　容　等
特別活動（学校行事）	・人との触れ合いを深め共に学ぶこと。 ・他人を思いやる心を培うこと。
自立活動（人間関係の形成） （コミュニケーション）	・他者とのかかわりの基礎に関すること。 ・他者の意図や感情の理解に関すること。 ・コミュニケーションの基礎的能力に関すること。 ・コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。

２　指導略案

学 習 活 動	活　動　内　容
＜事前指導＞ ○交流活動の目的の理解と予定の確認 ○事前準備	○交流活動の目的を説明する。 ・視覚障害や聴覚障害のある人とコミュニケーションを図る方法を考えさせ、調べさせる。 ・前回の交流活動で使った手話や筆談以外の方法（チャット）で、相手とより通じ合えるかどうか確認してみることを提案する。 ○事前準備 ・自己紹介の準備（自分のこと、自分が通っている学校のこと等） ・チャットや音声読み上げソフトウェアの使い方の学習
＜交流活動＞ ○校内見学 ○チャットによる会話	○手話や板書を使ったあいさつで聴覚障害の生徒に安心感をもたせる。 ○校内を案内する。 ・必要に応じて筆談で説明する。 ・次の活動（チャット）での話題になるよう、生徒が興味をもちやすい解剖学教室等を案内する。 ○教室でＩＣＴ機器を活用したチャットによる会話を体験させる。 ・互いに自己紹介をするように促した後は、生徒同士のやり取りに任せる。 ・会話が途切れたときは、「校内見学の感想」「自分について」「相手に聞きたいこと」等の話題例を提示する。 ・可能な限り生徒同士でチャットを使わせるが、必要に応じてチャット以外の方法を使わせたり、教師が手話通訳をしたりする。
＜事後指導＞ ○交流活動のまとめ	○感想を述べさせることで、本時の自己評価を行わせるとともに、今後の交流活動に生かすようにさせる。 ・前回の交流活動と比べて通じ合えたか。 ・手話や筆談等と比べて、チャットは会話に有効だったか。 ・チャットは便利か。どんな時に使えそうか。チャット以外のよい手段はないか。 ・チャットを使うときに気を付けなければならないことは何だったか。 （必要に応じて、チャットのログを見せて振り返りをさせる。） ○手紙、ビデオ、電子メール等により、交流相手にお礼を出させる。

３　展開の実際

【対象学年・児童生徒】

本事例は、異なる総合支援学校中学部２年の視覚障害のある生徒と、中学部１年の聴覚障害のある生徒の交流活動の実践である。コミュニケーション面から見た二人の実態は以下の通りである。

生徒名・学年	実　　態
A 中学部２年 ＜視覚障害＞ （弱視）	○学級は一人だけの在籍である。 ○コンピュータへの文字入力は可能だが、入力ミスが多い。 ○携帯メール利用の経験がある。 ○電話帳や住宅地図で行ったことのある店舗や知人の住所を探すことを好む。 ○周囲の人に、積極的（一方的）に話し続けることがある。
B 中学部１年 ＜聴覚障害＞	○学級は一人だけの在籍である。 ○手話、発音サイン、口話（※）、文字が主なコミュニケーション手段である。 ○コンピュータへの文字入力はスムーズだが、話題づくりが苦手な面がある。 ○携帯メール利用の際、友達との行き違いからトラブルになりかけたことがある。 ○ゲームやカードなどの話題では、慣れた友達と積極的に会話を楽しむ。

※口話・・・口形の読み取り

【新たなコミュニケーション手段との出会い】

１回目の交流活動では、生徒Ａが覚えた手話やジェスチャーで自己紹介をしたり、生徒Ｂが筆談を使って説明しようとするなど、両生徒とも、何とか通じ合おうとしていた。

今回は、両生徒がコンピュータへの文字入力が可能であるということに着目し、チャットを使ってみることにした。両生徒ともチャットを使うのは初めてであった。

はじめ、両者とも緊張し、なかなか会話が進まなかったが、好きな教科が同じと分かったあたりから、積極的なやりとりが始まった。途中、教師の声かけが必要な場面もあったが、後半は生徒同士で、ゲームや趣味について話を積極的に進めることができた。

４　情報機器等の活用の工夫

【フリーウェアを利用したＩＣＴ環境の構築】

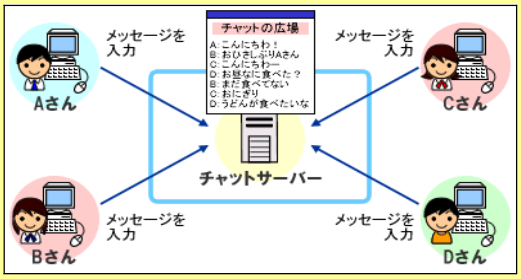
本事例は、多くの学校での利用を想定して、校内の既存の機器を活用することとした。

具体的には、フリーのチャットソフトウェア、音声読み上げソフトウェアを導入し、教室内に簡単なＬＡＮを組むことで、チャット及び音声の読み上げによる会話を行えるようにした。

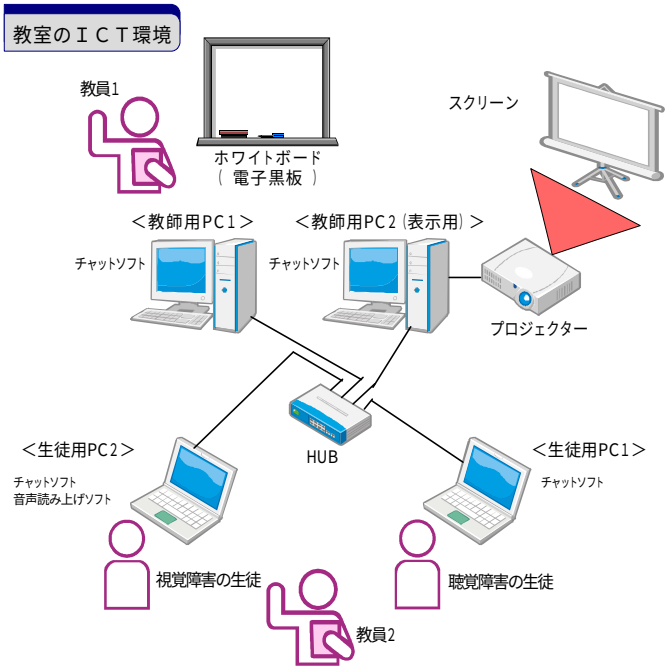
＜チャットについて＞

インターネットで、複数の人と同時に文字やイラストを用いて会話できる仕組み。

誰かがメッセージを入力すると、即座にすべての参加者に送信されるので、数人の間で会話をするように使うことができる。



総務省「国民のための情報セキュリティサイト」より

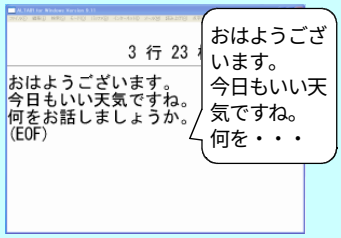


【使用ソフトウェア】

○チャットソフトウェア（Ｌａｎｃａｓｔｅｒ）
　簡単なＬＡＮの環境があれば、すぐに導入できる。初回に名前（ニックネーム）を設定すれば簡単に接続でき、また、校内ＬＡＮに導入すれば、離れた教室にいる生徒とも会話が可能である。名前が呼ばれたときにはディスプレイ上に通知され、コンピュータを常に起動しておけば、授業時間以外でも利用できる。
　今回、視覚障害（弱視）の生徒が使用するということで、フォントの大きさを変更できることから、このソフトウェアを利用することとした。

○音声読み上げソフトウェア（ＡＬＴＡＩＲ＜アルティア＞）
　音声読み上げ、点字ピンディスプレイ出力、拡大文字表示等の機能を提供する。キーボード操作だけで文章の作成、インターネットによる情報交換、情報収集が可能である。

※本事例の生徒Ａは弱視があり、画面の文字のポイント数の調整で対応した。
※聴覚障害の児童生徒のためのチャットと、視覚障害の児童生徒のための音声読み上げ機能を活用した事例の蓄積・検討により、他障害の指導への活用（汎用性）が期待できる。



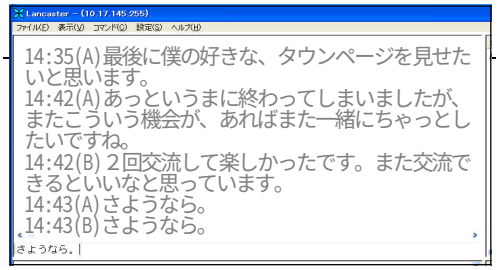
　これらのソフトウェアは、インターネットで「チャットソフト」「音声読み上げソフト」等で検索し、ダウンロードサイトにアクセスすることで入手可能である。

５　情報機器等の活用の効果

　実践後の検討会で、チャットの効果とともに、今後の指導や支援に生かすための工夫や他の障害への活用の可能性等について話し合った。

【チャットの効果】

　視覚障害（弱視）のある生徒Ａは、文字になった自分の発言を確認、修正しながら会話をすることができた。聴覚障害のある生徒Ｂは、言葉が文字で表現されることに安心し、笑顔で会話を楽しんでいた。

会話の流れ	生徒の様子	教師の支援（●）・チャットの効果（◆）
１　自己紹介 （１）名前 （２）学年	＜　５　分間＞ ○コンピュータの前に座ったまま。 ○両生徒は一方的に自分の名前を伝えた。	●自己紹介するよう声をかけた。
２　勉強について （１）好きな教科 （２）苦手な教科	＜１０分間＞ ○生徒Ｂは、好きな教科を聞いた。 ○生徒Ａは好きな教科を教え聞き返した。 ○好きな教科、苦手な教科が同じことが分かって、積極的に入力し始めた。	●お互いに知りたいことは何かを聞くように促した。 ◆画面で相手の発言（好きな教科名）を確認でき、相手に自分の思いが伝わることを喜び、安心して会話を続けることができた。
３　趣味について （１）カード （２）ゲーム	＜１５分間＞ ○生徒Ｂはカードについて、生徒Ａは電話帳について同時に話し始めた。 ○生徒Ａは自分が話したいことを我慢し、カードについて聞き返した。 ○生徒Ａは、カードについて余り知らなかったため、ゲームに話題を換えた。 ○ゲームで勝負しようと誘ったり、ゲームのキャラクターについて教えようとする等、自分たちで話題を広げた。	◆画面で現在の会話のテーマを確認できるので、テーマや相手に合わせた発言をすることができた。 ●「分からない」「知りたい」等の気持ちや、つぶやきを相手に伝えるように促した。 ◆発言の履歴（ログ）を見直して、会話の流れを確認したり、発言を修正したりすることができた。 
４　別れの挨拶	＜　５　分間＞ ○生徒Ａは、電話帳について話したいと伝えた。 ○お互いにお別れの挨拶をした。 ※この後、生徒Ａは、ジェスチャーを交えながら、自分の好きなことを直接伝えようとした。	

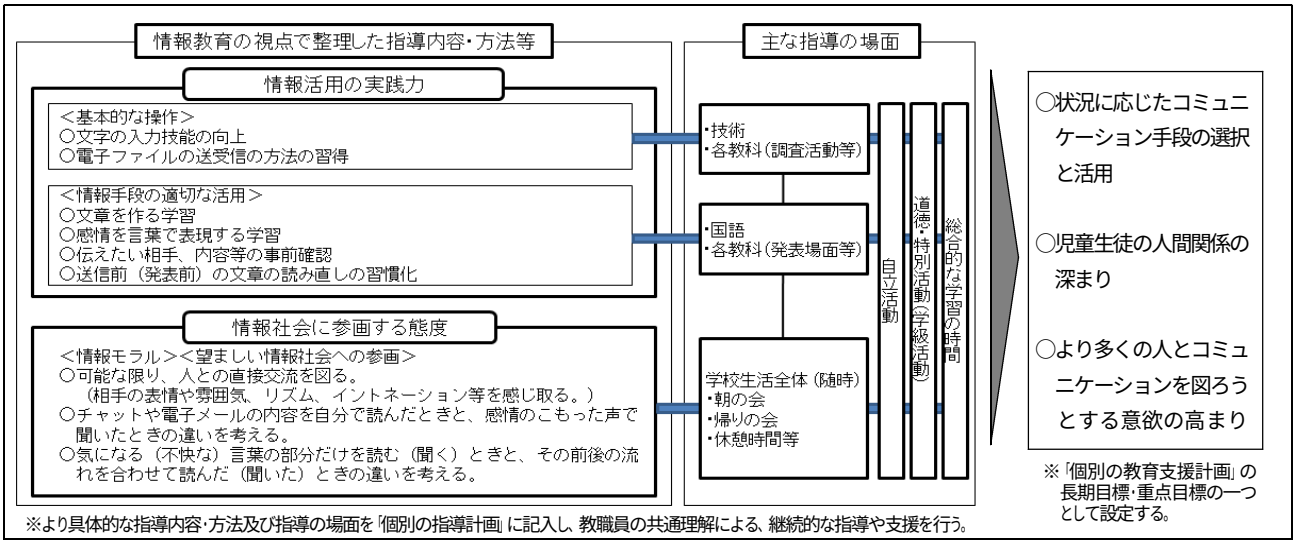
交流活動後の生徒の感想は、「コミュニケーション手段が異なる場合も相手と直接かかわりあえる」「話したい内容を確実に伝えることができる」などのチャットのメリットを示している。

＜交流活動後の生徒の感想＞
○生徒Ａ　・チャットは日常生活では少し不便なので、会話で伝えにくいときに使うとよい。
・チャットは手話通訳よりも、実際に書いて（入力して）気持ちを伝えることができる。
・チャットはいつもの会話と違って会話の練習（勉強）になるし、楽しいのでまたしてみたい。
○生徒Ｂ　・一番分かりやすいのは手話と発音サインだと思う。
・チャットは手話を知らない人にも相手に説明がしやすいし、携帯よりも読みやすい。
・授業では先生が質問するときにチャットを使うと分かりやすいと思う。
・銀行や病院など声だけで名前を呼ばれるときに文字表示があると便利だと思う。

【チャットを活用してコミュニケーション能力を向上させるための課題】

チャットや電子メールの活用に当たっては、文字のみのコミュニケーションに偏らず、コミュニケーションの基礎的能力を高め、人間関係のトラブルを防ぐ指導や支援を進める必要がある。

＜課題（ＩＣＴ活用のための視点）＞	＜　工　夫　・　改　善　＞
○柔軟なコミュニケーション手段の選択 ・チャットが難しいときに、他の手段を自分で考え、使うことが必要	○学校生活の様々な場面で、筆談やジェスチャー、図示等の手段を使う機会を設定し、自分でコミュニケーション手段を選択させ、利用させる。
○コミュニケーション手段を使うための基礎的な知識・技能の習得 ・コンピュータの文字入力の上達が必要	○技術や総合的な学習の時間、休憩時間等にコンピュータに親しませるとともに、情報を取捨選択し、必要な情報を伝える練習を行う。
○コミュニケーションの基礎的能力の向上 ・話題を発見し、広げていく力が必要 ・相手の意図や感情を理解し、場に応じた言動をとることが必要	○生徒に話題を広げる視点を助言し、教師相手に実践させる。 ・季節、趣味、着る物、仲間、食べ物、家族の話題　等 ○チャットの記録を読ませ、会話を振り返させる。 ○国語の時間を中心に文章を作る学習を行う。
○目的を明確にしたＩＣＴ活用環境の工夫 ・生徒のＩＣＴ活用能力を育てるためには、ただ使わせるだけでは不十分	○コミュニケーション手段が異なる生徒同士の場合の段階 ①同じ教室内でチャットを行い、互いの存在と様子を感じさせる。 ②別の教室間でチャットを行い、伝わることの大切さを感じさせる。



【他の障害への活用の可能性】
○「話す・聞く」ことが難しい発達障害等の児童生徒の感情表現・意思伝達の手段として、チャットを活用し、教師や児童生徒同士でのコミュニケーションを支援する。
○対面のやり取りを苦手としている発達障害等の児童生徒に、電子メールでのコミュニケーションを取り入れる。
○文字の読解が難しく、聞き取りが可能な発達障害等の児童生徒に、教師の指示・説明や他の児童生徒の発言内容を音声読み上げソフトウェアで音声化して支援する。